

エントリー名：大阪教育大学附属天王寺小学校

活動名：とものつくる豊かな学び ～みんなが参加・活躍できる学校へ～

解決すべき課題：

本校は多くの児童が公共交通機関を利用して通学してきているため、保護者同士の関係が希薄になってしまいうということが課題であった。そこで毎月 1 度参観日や各学校行事を設定し、保護者が来校する機会を設定していた。

しかしコロナ禍では、その文化を継続することが難しい状況となってしまった。保護者が来校する機会が失われたことで、「子どもの学校でのようすや友だち関係がわからない。」「保護者同士のコミュニケーションが取れず孤立している。」等、保護者からの不安の声も出てきた。コロナ禍においては、子どもたち同士のコミュニケーションの機会の喪失が話題にあがっていたが、実は、保護者同士のコミュニケーションの機会も失われてしまったことも課題であると考えた。

一方で、教員からは働き方改革を推進していく中で「毎月の参観日の準備が負担だ。」という声も聞かれるようになってきた。学校のようすを知りたい（＝来校したい）保護者と、負担を減らしてほしい（＝参観日を減らしたい）教員、というように双方の思いが異なっていた。

そこで、「保護者に学校のようすを知ってもらうこと（理解を得ること）」「保護者に手伝ってもらうことで教員の負担感を軽減すること」という両側面を捉え、『教員と保護者とともに教育活動をつくる』という方向性を決めた。子どもたちを取り巻く身近な大人である私たち教員と保護者が、ともにさまざまな教育活動に取り組むことで、子どもたちの豊かな学びの機会をつくることをめざしたのである。

目標・方針：

まずは、教員自身が「保護者が来校する＝見張られている」という意識を変容させるために、「日常的なわが子の姿や学級のようすを見たい。」「子どもたちに学校生活を楽しんでほしい。」「そのためにできることがあれば、手伝いたい。」という保護者の率直な意見を集めた VTR を視聴することを年度当初の教員研修の場とした。保護者が日常的に来校する目的は「見張り」でなく「サポート」であるということを意識づける必要があると考えたからである。同時に PTA 役員さんに「保護者も積極的に学校内の教育活動に参画してほしい」という学校としての立場を説明する場を設定した。このように年度当初に「子どもたちの笑顔を見たいのは、教員だけでなく保護者も同じ思いである」という方向性を明確に周知し共通理解を図った。

活動内容：

- PTA 役員と教員の顔合わせ会を行った。（方向性の共有）
- 学校行事だけでなく、本校教員の予定（研究授業/会議/出張等）を記した Google カレンダーを PTA 役員と共有し、教員の繁忙期への理解を図るようにした。
- 既存の行事や教育活動の中で保護者の方と一緒にすることが出来る内容は、何かを検討した。また、日常的な関わりとして、保護者と子どもと一緒に掃除する、休み時間に保護者の方に図書室を開放してもらい、いつでも本を貸出/返却できるようにした。
- 保護者の方が乳幼児を連れて来校しやすい環境づくりのために、「おむつ取り換えシート付トイレ」を設置し、また授乳や着替えができる部屋をつくった。
- 今年度新しく取り組んだ活動は、以下の通りである。
 - （6 月）不審者避難訓練にて、医療従事経験のある保護者による救護班結成。
 - （7 月）保護者が企画・運営した「納涼祭」実施。
 - （9 月）防災宿泊訓練にて、保護者が企画運営する「かき氷コーナー」設置。
 - （11 月）保護者が企画・運営した「読書の秋週間」実施。

取組の過程：

まずは教員間で学校の方向性を共有した。VTR（右写真）を視聴後、「ひとりで頑張らなくてもいいんだ。これからは保護者にも相談してみよう。」「保護者がこんなにもお子さんの成長を願っているんだということが分かった。」等、肯定的な意見が集まり、教員の意識変容の兆しが見られた。その後、PTA 代表委員会において、各 PTA 委員会・PTA クラブ活動の代表者や各学級代表の方に方向性を伝え、積極的な参画を依頼した。また、各学校行事（各宿泊行事、プール学習、運動会、教育実習）前には、PTA 役員と事前打ち合わせ会を行い、手伝ってもらいたい内容を伝えたり、保護者からの要望を聞いたりする場をもった。ここで出てきた「運動会で参観しやすいように、最前列を当該学年に譲るようアナウンスにアナウンスをしてほしい。」「学校行事の変更はもっと早く知らせてほしい。」等、保護者からの率直な意見は、すぐに取り入れることで「学校の学びをみんなでつくる」ことを態度として示した。

同時に各学年の HP で日々の取組を知らせる際にも「参観日だけでなく、ご都合よい時にいつでも来校してください。」「〇日には、アサガオを植えます。よかったらお手伝いに来てください。」等の情報を繰り返し伝えてきた。

この結果、日常的に保護者が来校する文化ができてきたが、各家庭の事情は異なり、学校に来たくても来ることができない保護者もいる。そうすると、「来校できないのは良くない」という雰囲気が生じてしまうことも危惧された。そこで「来校しなくても参加することができる活動」を保護者とともに考え、7 月「納涼祭」9 月「かき氷コーナー（防災宿泊訓練）」を企画した。前者は自宅でペットボトルを凍らせるという形で参加でき、後者は休日に参加することができる内容であった。

現在も「いつでも誰でも参加することができること」をめざして活動を続けている。

活動の成果：

今では、保護者が来校していることは日常的になってきた。現在 1 日平均 115 名（全校児童 624 名）の保護者が来校している。朝子どもと一緒に出勤している方が 10 分程度立ち寄って、子どもの様子を見たり、掃除を手伝ったり、というふうに気軽に来校しやすいという雰囲気になってきた。同時に、子どもたちや教員にとっても、「保護者がいることが日常」になってきており、学芸会の準備期間の今は、廊下で保護者と衣装や大道具のことを相談している姿も珍しくない。子どもたちも「今日は〇〇さんのお父さんと一緒に学校に来たよ。」「〇〇さんのお母さんが図書室で絵本を読んでくれたよ。」等と、いろんな保護者の方との関わりをもつことができるようになった。これからも子どもを介した大人（教員と保護者、保護者間）同士のコミュニティの場として学校が機能していくことをめざしていきたい。さらに『子どもだけでなく、大人も楽しむことができる居場所としての学校』を意識し、今後は地域の大人との関わりもより一層重視していきたい。



学校長と歴代 PTA 役員の方との懇親会のようすを VTR にした。これはその一場面。



くじを引いて当たりがでたら水を凍らせたペットボトルがもらえる「納涼祭」



父親の参加が多く見られた「かき氷コーナー」